

# ゆく雲

一葉女史

青空文庫



記者曰、一葉女史樋口夏子の君は明治五年をもて東京に生まれ、久しく中島歌子女史を師として今尚歌文を學ぶる。傍、武藏野、都の花、文學界等の諸雜誌に新作小説多く見えぬ、

## (上)

酒折の宮、山梨の岡、鹽山、裂石、さし手の名も都人の耳に聞きなれぬは、小  
 佛さゝ子の難處を越して猿橋のながれに眩めき、鶴瀬、駒飼見るほどの里もなき  
 に、勝沼の町とても東京にての場末ぞかし、甲府は流石に大厦高樓、躑躅が崎の城  
 跡など見る處のありとは言へど、汽車の便りよき頃にならば知らず、こと更の馬車腕車  
 に一晝夜をゆられて、いざ惠林寺の櫻見にといふ人はあるまじ、故郷なればこそ年  
 々、の夏休みにも、人は箱根伊香保ともよふし立つる中を、我れのみ一人あし曳の山の

甲斐に峯のしら雲あとを消すこと左りとは是非もなけれど、今歳この度みやこを離れて八王子に足をむける事これまでに覚えなき愁らさなり。

養父清左衛門、去歳より何處斯ふいふ噂があとくに残らぬやう、郵便爲替にて證

書面のとほりお送り申候へども、足りずば上杉さまにて御立かへを願ひ、諸事清潔

にして御歸りなさるべく、金故に恥ぢをお搔きなされては金庫の番をいたす我等が申わけ

なく候、前申せし通り短氣の大旦那さま頻に待ちこがれて大ぢれに御座候へば、其地の

御片つけすみ次第、一日もはやくと申納候。六藏といふ通ひ番頭の筆にて此様の迎ひ

ぶみ 状いやとは言ひがたし。

家に生※きの我れ實子にてもあらば、かゝる迎へのよしや十度十五たび來たらんとも、お

もひ立ちての修業なれば一ト廉の學問を研かぬほどは不孝の罪ゆるし給へともい

ひやりて、其我まゝの徹らぬ事もあるまじきなれど、愁らきは養子の身分と桂次はつく／

に 他人の自由を羨やみて、これからの行く末をも鎖りにつながれたるやうに考へぬ。

七つのとしより實家の貧を救はれて、生れしまゝなれば素跣足の尻きり半纏に田圃へ辨

當の持はこびなど、松のひでを燈火にかへて草鞋うちながら馬士歌でもうたふべか

りし身を、目鼻だちの何處やらが水子にて亡せたる總領によく似たりとて、今はなき

人なる地主の内儀に可愛がられ、はじめはお大盡の旦那と尊びし人を、父上と呼ぶやうに成りしは其身の幸福なれども、幸福ならぬ事おのづから其中にもあり、お作といふ娘の桂次よりは六つの年少にて十七ばかりになる無地の田舎娘をば、何うでも妻にもたねば納まらず、國を出るまでは左まで不運の縁とも思はざりしが、今日この頃は送りこしたる寫眞をさへ見るに物うく、これを妻に持ちて山梨の東郡に蟄伏する身かと思へば人のうらやむ造酒家の大身上は物のかずならず、よしや家督をうけつぎてからが親類縁者の干渉きびしければ、我が思ふ事に一錢の融通も叶ふまじく、いはゞ寶の藏の番人にて終るべき身の、氣に入らぬ妻までとは彌 《いよく》の重荷なり、うき世に義理といふ柵みのなくば、藏を持ぬしに返し長途の重荷を人にゆづりて、我れは此東京を十年も二十年も今すこしも離れがたき思ひ、そは何故と問ふ人のあらば切りぬけ立派に言ひわけの口上もあらんなれど、つくろひなき正の處もとに唯一人すてゝかへる事をしくをしく、別れては顔も見がたき後を思へば、今より胸の中もやくやとして自ら氣もふさぐべき種なり。

桂次が今をる此許は養家の縁に引かれて伯父伯母といふ間がら也、はじめて此家へ來たりしは十八の春、田舎縞の着物に肩縫あげをかしと笑はれ、八つ口をふさぎて大人の姿

にこしらへられしより二十二の今日までに、下宿屋住居を半分と見つもりても出入り  
 三年はたしかに世話をうけ、伯父の勝義が性質の氣むづかしい處から、無敵にわけの  
 わからぬ強情の加 《たゞ》女房にばかり手やはらかなる可笑しさも呑込め  
 ば、伯母なる人が口先ばかりの利口にて誰れにつきても根からさつぱり親切氣のなき、  
 我欲の目當てが明らかに見えねば笑ひかけた口もとまで結んで見せる現金の様子まで、  
 度 《たゞ》の經驗に大方は會得のつきて、此家にあらんとには金つかひ奇麗に  
 損をかけず、表むきは何處までも田舎書生の厄介者が舞ひこみて御世話に相成るとい  
 ふこしらへでなくては第一に伯母御前が御機嫌むづかし、上杉といふ苗字をば宜いこと  
 して大名の分家と利かせる見得ぼうの上なし、下女には奥様といはせ、着物は裾のな  
 がいを引いて、用をすれば肩がはるといふ、三十圓どりの會社員の妻が此形粧にて  
 繰廻しゆく家の中おもへば此女が小利口の才覺ひとつにて、良人が箔の光つて見  
 ゆるやら知らねども、失敬なは野澤桂次といふ見事立派の名前ある男を、かげに廻りて  
 は家の書生がと安々こなされて、御玄關番同様にははれる事馬鹿らしきの頂  
 上なれば、これのみにても寄りつかれぬ價值はたしかなるに、しかも此家の立はなれに  
 く、心わるきま、下宿屋あるきと思案をさだめても二週間と訪問を絶ちがたきは

あやし。

十年ばかり前にうせたる先妻の腹にぬひと呼ばれて、今の奥様には繼なる娘あり、桂次がはじめて見し時は十四か三か、唐人鬻に赤き切れかけて、姿はおさなびたれども母のちがふ子は何處やらをとなく見ゆるものと氣の毒に思ひしは、我れも他人の手にて育ちし同情を持つてばなり、何事も母親に氣をかね、父にまで遠慮がちなれば自づから詞かずも多からず、一目に見わたした處では柔和しい温順の娘といふばかり、格別利發ともはげしいとも人は思ふまじ、父母そろひて家の内に籠り居にても濟むべき娘が、人目に立つほど才女など呼ばるゝは大方お侠の飛びあがりの、甘やかされの我まゝのつゝしみなき高慢より立つ名なるべく、物にはゞかる心ありて萬ひかへ目にと氣をつくれば、十が七に見えて三分の損はあるものと桂次は故郷のお作が上まで思ひくらべて、いよくおぬひが身のいたましく、伯母が高慢がほはつく／＼と嫌やなれども、あの高慢にあの温順なる身にて事なく仕へんとする氣苦勞を思ひやれば、せめては傍近く心ぞへをも爲し、慰めにも爲りてやり度と、人知らば可笑かるべき自ほれも手傳ひて、おぬひの事といへば我が事のように喜びもし怒りもして過ぎ來つるを、見すて、我れ今故郷にかへらば残れる身の心ほそさいかばかりなるべき、あはれなるは繼子の身分にして、

腑甲斐ないものは養子の我れと、今更のやうに世の中のおちきなきを思ひぬ。

## (中)

まゝ母育ちとて誰れもいふ事なれど、あるが中にも女の子の大方すなほに生たつは稀なり、少し世間並除け物の緩い子は、底意地はつて馬鹿強情など人に嫌はるゝ事この上なし、小利口なるは狡るき性根をやしなうて面かぶりの大變ものに成もあり、しやんとせし氣性ありて人間の質の正直なるは、すね者の部類にまぎれて其身に取れば生涯の損おもふべし、上杉のおぬひと言ふ娘、桂次がのぼせるだけ容貌も十人なみ少しあがりて、よみ書き十露盤それは小學校にて學びし丈のことは出來て、我が名にちなめる針仕事は袴の仕立までわけなきよし、十歳ばかりの頃までは相應に悪戯もつよく、女にしてはと亡き母親に眉根を寄せきして、ほころびの小言も十分に聞きし物なり、今の母は父親が上役なりし人の隠し妻とやらお妾とやら、種々曰くのつきし難物のよしなれども、持ねばならぬ義理ありて引うけしにや、それとも父が好みて申受しか、その邊たしかならねど勢力おさく女房天下と申やうな景色なれば、まゝ子たる

身のおぬひが此瀨に立ちて泣くは道理なり、もの言へば睨まれ、笑へば怒られ、氣を利か  
 せれば小ぎかしと云ひ、ひかえ目にあれば鈍な子と叱かられる、二葉の新芽に雪霜のふ  
 りかゝりて、これでも延びるかと思へるやうな仕方、堪へて眞直ぐに延びたつ事人間  
 わぎには叶ふまじ、泣いて泣いて泣き盡くして、訴へたいにも父の心は鐵のやうに冷えて、  
 ぬる湯一杯たまはらん情もなきに、まして他人の誰れにか慨つべき、月の十日に母さまが  
 おんはか御墓まゐりを谷中の寺に樂しみて、しきみ線香夫 《それく》の供へ物もまだ終ら  
 ぬに、母さま母さま私を引取つて下されと石塔に抱きつきて遠慮なき熱涙、苔のし  
 たにて聞かば石もゆるぐべし、井戸がはに手を掛けて水をのぞきし事三四度に及びしが、つ  
 く／＼思へば無情とても父様は眞實のなるに、我れはかなく成りて宜からぬ名を人  
 の耳に傳へれば、残れる耻は誰が上ならず、勿躰なき身の覺悟と心の中に侘言して、  
 どうでも死なれぬ世に生中目を明きて過ぎんとすれば、人並のうい事つらい事、さり  
 とは此身に堪へがたし、一生五十年めくらに成りて終らば事なからんと夫れよりは一筋に  
 はさま母様の御機嫌、父が氣に入るやう一切この身を無いものにして勤むれば家の内なみ風お  
 こらずして、軒ばの松に鶴が來て巢をくひはせぬか、これを世間の目に何と見るらん、母  
 御は世辭上手にて人を外らさぬ甘さあれば、身を無いものにして闇をたどる娘よりも、

一枚あがりて、評判ひょうばんわるからぬやら。

お縫ぬいとてもまだ年としわかなる身の桂次けいじが親切しんせつはうれしからぬに非あらず、親おやにすら捨すてられたらんやうな我が如ごときものを、心こころにかけて可愛かわいがりて下さるは辱かたじけなき事ことと思おもへども、桂次けいじが思おもひやりに比くべては遙はるかに落おちつきて冷ひややかなる物ものなり、おぬひさむ我われがいよく歸國きこくしたと成なつたならば、あなたは何なんと思おもふて下さろう、朝夕あさゆふの手てがはぶけて、厄介やくかいが

《たびく》御出おいであそばして下さりませうか、そうならば嬉うれしけれど、言いふ、我われとても行ゆきたくてゆく故郷ふるさとでなければ、此處こゝに居あられる物ものなら歸かへるではなく、出でて來こられる都合がふならば又また今いままでのやうにお世話せわに成なりに來きまする、成なるべくは鳥渡ちよつとたち歸かへりに直すぐも出しゆつ京けいしたきものと輕かるくいへば、それでもあなたは一家かの御主人ごしゆじんさまに成なりて采配さいはいをおとりなさらずは叶かなふまじ、今いままでのやうなお樂らくの御身分ごみぶんではいらつしやらぬ筈はずと押おへられて、されば誠まことに大難だいなんに逢あひたる身みと思おもはせ。

我が養家やうかは大藤村おほふぢむらの中萩原なかはぎはらとて、見みわたす限りかぎは天目山てんもくざん、大菩薩だいぼさつ峠たうげの山やま 《やまく》峰みね 《みねく》垣かきをつくりて、西南せいなんにそびゆる白妙しろたへの富士ふじの嶺ねは、をしみて面おもかけを示しめさねども、冬ふゆの雪ゆきおろしは遠慮ゑんりよなく身みをきる寒さむさ、魚うをといひては甲府かうふまで五里りの道みちを取りとりにやりて、やうくまぐろの刺身さしみが口くちに入る位いくらゐ、あなたは御存ごぞんじなければお

親父さんに聞て見給へ、それは随分不便利にて不潔にて、東京より歸りたる夏分などは我まんのなりがたき事もあり、そんな處に我れは括られて、面白くもない仕事に追はれて、逢ひたい人には逢はれず、見たい土地はふみ難く、兀々として月日を送らねばならぬかと思に、氣のふさぐも道理とせめては貴嬢でもあはれんでくれ給へ、可愛さうなものでは無きかと言ふに、あなたは左様仰しやれど母などはお浦山しき御身分と申て居ります。

何が此様な身分うら山しい事か、こゝで我れが幸福といふを考へれば、歸國するに先だちてお作が頓死するといふ様なことにならば、一人娘のことゆゑ父親おどろいて暫時は家督沙汰やめになるべく、然るうちに少々なりともやかましき財産などの有れば、みすく他人なる我れに引わたす事をしくも成るべく、又は縁者の中なる欲ばりども唯にはあらで運動することたしかなり、その曉に何かいさゝか仕損なゐでもこしらゆれば我れは首尾よく離縁になりて、一本立の野中の杉ともならば、其れよりは我が自由にて其のとき幸福といふ詞を與へ給へと笑ふに、おぬひ惘れて貴君は其様の事正氣で仰しやりますか、平常はやさしい方と存じましたに、お作様に頓死しろとは陰ながらの嘘しるあんまりでござります、お可愛想なことをと少し涙くんでお作をかばふに、それは貴

嬢なつが當たう人にんを見みぬゆゑ可愛かわい想さうとも思おもふか知しらねど、お作さくよりは我われの方ほうを憐あはれんでくれ  
 て宜いい筈はず、目めに見みえぬ繩なはにつながれて引ひかれてゆくやうな我われをば、あなたは眞しんの處ところ何なにとも  
 思おもふてくれねば、勝かつ手にしろといふ風ふうで我われの事こととは少すこしも察さつしてくれる様やう子すが見みえぬ、  
 今いまも今いま居いまなくなつたら淋さびしかろうとお言いひなされたはほんの口くち先さきの世せ辭じで、あんな者ものは  
 早はやく出でてゆけと箒ほうきに、ろぼそく成なりますとて身みをちゞめて引ひ退しりぞくに、桂けい次じ拍ひ子ようしぬけ  
 のしていよゝゝ頭あたまの重おもたくなりぬ。  
 上うへ杉すぎの隣となり家なにしうは何なに宗しうかの御おん梵てら刹さまにて寺じ内ない廣ひろ々と桃もも櫻くらいろゝ植うゑわたしたれば、此こ  
 方なたの二にかい階みより見みおろすに雲くもは棚たな曳ひく天てん上じやう界かいに似にて、腰こしごろもの觀くわん音おんさま濡ぬれ佛ほとけに  
 ておはします御おん肩かたのあたり膝ひざのあたり、はらゝと花はな散ちりこぼれて前まへに供そなへし櫛しきの枝えだに  
 つもれるもをかしく、下したゆく子こ守もりが鉢はち卷まきの上うへ、しばしやどかせ春はるのゆく衛ゑと舞まひく  
 るもみゆ、かすむ夕ゆふべの朧おぼろ月つきよに人ひと顔がほほの／＼と暗くらく成なりて、風かぜ少すこしそふ寺じ内ないの  
 花はなをば去こぞ歳としも一おと昨し年も其そのまへの年としも、桂けい次じ此こ處ところに大おほ方かたは宿やどを定さだめて、ぶら／＼あるき  
 に立たちならしたる處ところなれば、今ことし歳としこの度たびとりわけて珍めづらしきさまにもあらぬを、今いまこん春はるは  
 とても立たちかへり踏ふむべき地ちにあらずと思おもふに、この濡ぬれ佛ほとけさまにも中なか々の名な残ごりをしまれ  
 て、夕ゆふ終おほりての宵よひ々い家いでを出おんては御おん寺てら參まいり殊しゆ勝しょうに、觀くわん音おんさまには合が掌しょうを申まをて、

我が戀人のゆく末を守り玉へと、お志しのほどいつまでも消えねば宜いが。

## (下)

我れのみ一人のぼせて耳鳴りやすべき桂次が熱ははげしけれども、おぬひと言ふもの木にて作られたるやうの人なれば、まづは上杉の家にかましましき沙汰もおこらず、大藤村にお作が夢ものどかなるべし、四月の十五日歸國に極まりて土産物など折柄日清の戦争畫、大勝利の袋もの、ぱちん羽織の紐、白粉かんざし櫻香の油、縁類廣ければとり／＼に香水、石鹼の氣取りたるも買ふめり、おぬひは桂次が未來の妻にと贈りもの中へ薄藤色の縹袴の襟に白ぬきの牡丹花の形あるをやりけるに、これを眺めし時の桂次が顔、氣の毒らしかりしと後にて下女の竹が申き。

桂次がもとへ送りこしたる寫眞はあれども、秘しがくしに取納めて人には見せぬか、夫れとも人しらぬ火鉢の灰になり終りしか、桂次ならぬもの知るによしなけれど、さる頃にはがきにて處用と申こしたる文面は男の通りにて名書きも六藏の分なりしかど、手跡大分あがりて見よげに成りしと父親の自まんより、娘に書かせたる事論なしとこゝの

内儀ないぎが人の悪わるき目めにて睨にらみぬ、手跡しゆせきによりて人の顔かほつきを思おもひやるは、名なを聞きいて人の  
 善ぜん悪あくを判はん断だんするやうなもの、當代たうだいの能書のうしよに業なり平ひらさまならぬもおはしますぞかし、  
 されども心こゝろも用もちひ一つにて悪筆あくひつなりとも見みよげのしたゝめ方かたはあるべきと、達者たつしやめ  
 かして筋すぢもなき走り書はしきに人ひとよみがたき文字もじならば詮せんなし、お作さくの手てはいかなりしか知ら  
 ねど、此處こゝの内儀ないぎが目めの前まへにうかびたる形かたちは、横よこ巾いんひろく長たけつまりし顔かほに、目鼻めはなたちは  
 まづくもあるまじけれど、うすくして首筋くびすぢくつきりとせず、胴どうよりは足あしの長ながい女をんなとお  
 ぼゆると言いふ、すて筆ふでながく引ひいて見みともなかりしか可笑をかし、桂次けいじは東京とうきやうに見みてさへ醜わ  
 い方ほうでは無いなに、大藤村おほふぢむらの光ひかる君歸郷きみききやうといふ事ことにならば、機場はたばの女をんなが白粉おしろいのぬりかた  
 思おもはれると此處こゝにての取沙汰とりさた、容貌きりようのわるい妻つまを持つもつぐらゐ我慢がまんもなる筈はず、水呑みづのみの小  
 作さくが子ことして一足飛そくどびのお大盡だいじんなればと、やがては實家じつかをさへ洗あえあはれて、人ひとの口くちさがなし  
 伯父そぢ伯母おば一つになつて嘲あざけるやうな口調くつてうを、桂次けいじが耳みみに入いらぬこそよけれ、一人氣ひとりきの毒どくと思おも  
 ふはお縫ぬひなり。  
 荷物にもつは通運便つううんびんにて先さきへたゝせたれば残のこるは身み一つに輕かろ 《かる／＼》しき桂次けいじ、今日けふ  
 も明日あすもと友達ともだちのもとを馳はせめぐりて何なにやらん用事ようじはあるものなり、僅わづかなる人目ひとめの暇ひま  
 を求めもとてお縫ぬひが袂たもとをひかえ、我われは君きみに厭いとはれて別わかるゝなれども夢ゆめいさゝか恨うらむ事ことをばな

すまじ、君はおのづから君の本地ありて其島田をば丸曲にゆひかへる折のきたるべく、  
 うつくしき乳房を可愛き人に含まする時もあるべし、我れは唯だ君の身の幸福なれかし、  
 すこやかなれかしと祈りて此長き世をば盡さんには随分とも親孝行にてあられよ、  
 母御前の意地わるに逆らふやうの事は君として無きに相違なけれどもこれ第一に心がけ給  
 へ、言ふことは多し、思ふことは多し、我れは世を終るまで君のもとへ文の便りをたゞざ  
 るべければ、君よりも十通に一度の返事を與へ給へ、睡りがたき秋の夜は胸に抱いてまぼ  
 ろしの面影をも見んと、このやうの數 《かずく》を並らべて男なきに涙のこぼれる  
 に、ふり仰向てはんけちに顔を拭ふさま、心よわげなれど誰れもこんな物なるべし、今か  
 ら歸るといふ故郷の事養家のこと、我身の事お作の事みなから忘れて世はお縫ひとりの  
 やうに思はるゝも闇なり、此時こんな場合にはかなき女心の引入られて、一生消  
 えぬかなしき影を胸にきざむ人もあり、岩木のやうなるお縫なれば何と思ひしかは知らね  
 ども、涙ほろくこぼれて一ト言もなし。  
 春の夜の夢のうき橋、と絶える横ぐもの空に東京を思ひ立ちて、道よりもあれば新  
 宿までは腕車がよしといふ、八王子までは汽車の中、をりればやがて馬車にゆられて、  
 小佛の峠もほどなく越ゆれば、上野原、つる川、野田尻、犬目、鳥澤も過ぐれば猿

はし近くちかに其夜そのよは宿やどるべし、巴峽はきようのさけびは聞きこえぬまでも、笛吹川ふえふきがはの響ひびきに夢ゆめむすび憂うく、これにも腸はらわたはたゝるべき聲こゑあり、勝沼かつぬまよりの端書はがき一度とゞきて四日目にぞ七里さとの消印けしんある封状ふうじやう二つ、一つはお縫ぬいへ向むけてこれは長ながかりし、桂次けいじはかくて大藤村おほふじむらひの人に成なりぬ。

世よにたのまれぬを男をとこ心こころといふ、それよ秋あきの空そらの夕日ゆふひにはかに搔かきくもりて、傘かさなき野道のに横よこしぶきの難義なんぎさ、出であひし物ものはみな其様そのやうに申まをせども是これみな時ときのはづみぞかし、波なみこえよとて末すゑの松山まつやまちぎれるもなく、男傾城をとこけいせいならぬ身みの空涙そぬみだこぼして何なにに成なるべきや、昨日きのふあはれと見みしは昨日きのふのあはれ、今日けふの我わが身みに爲なす業わざしげゝれば、忘わするゝとなしに忘わすれて一生せうは夢ゆめの如ごとし、露つゆの世よといへばほろりとせしもの、はかないの上うへなしなり、思おもへば男をとこは結いひなづけ髪かみの妻つまある身み、いやとても應おうとても浮世うきよの義理ぎりをおもひ斷たつほどのこと此このひとこのみ結いひなづけ髪かみの妻つまある身み、いやとても應おうとても浮世うきよの義理ぎりをおもひ斷たつほどのこと出来できあがりて、やがては父ちちとも言いはるべき身みなり、諸縁しよゑんこれより引ひかれて斷たちがたき絆ほどし次第しだいにふゆれば、一人にん一箇この野澤桂次のさわけいじならず、運うんよくは萬まんの身代しんだい十萬まんの延のばして山梨縣やまなしけんの多額納税たがくのうぜいと銘めいうたんも斗はかりがたけれど、契ちぎりし詞ことばはあとの湊みなとに残のこして、舟ふねは流ながれに隨した

がひ人は世に引かれて、遠ざかりゆく事千里、二千里、一萬里、此處三十里の隔てなれども心かよはずは八重がすみ外山の峰をかくすに似たり、花ちりて青葉の頃までにお縫が手もとに文三通、こと細か成けるよし、五月雨軒ばに晴れまなく人戀しき折ふし、彼方よりも數 《かずく》 思ひ出の詞うれしく見つる、夫れも過ぎては月に一二度の便り、はじめは三四度も有りけるを後には一度の月あるを恨みしが、秋蠶のはきたてとかいへるに懸りしより、二月に一度、三月に一度、今の間半年目、一年目、年始の状と暑中見舞の突際になりて、文言うるさしとならば端書にても事は足るべし、あはれ可笑しと軒ばの櫻くる年も笑ふて、隣の寺の觀音様御手を膝に柔和の御相これも笑めるが如く、若いさかりの熱といふ物にあはれみ給へば、此處なる冷やかのお縫も笑くぼを頬にかべて世に立つ事はならぬか、相かはらず父様の御機嫌、母の氣をはかりて、我身をな物にして上杉家の安隱をはかりぬれど。ほころびが切れてはむづかし



# 青空文庫情報

底本：「太陽 第壹卷第五號」博文館

1895（明治28）年5月5日発行

初出：「太陽 第壹卷第五號」博文館

1895（明治28）年5月5日発行

※「男」に対するルビの「をとこ」と「おとこ」、「頂上」に対するルビの「てうじよう」と「ちやうじよう」、「可愛」に対するルビの「かあい」と「かわいい」、「可愛想」に対するルビの「かわいそう」と「かわいさう」の混在は、底本通りです。

※変体仮名は、通常の仮名で入力しました。

入力：万波通彦

校正：猫の手びい

2018年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ゆく雲 一葉女史

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>